

---

# 君のおかげ

ぱるひこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君のおかげ

### 【Nコード】

N7118A

### 【作者名】

ぱるひこ

### 【あらすじ】

つまらない日常生活にあきた高校生と不思議なガキんちよの物語

## 第一件・バイト探し

つまらない。毎日毎日同じ事の繰り返し。何か新しい事はないかといつも考えている。しかし何も無い。だから同じ事を繰り返す。どうにかして抜け出したいこの生活。

神崎八郎・年齢十六歳・職業高校生。現在バイトの面接中。

「うちは高校生は雇わないんだよ。悪いけど帰ってくれる」

あつさりことわられた。これで五連敗。つーかその野郎高校生だろ！と叫びたいのを我慢して店から出て行った。今までのつまらない生活から抜け出すためにバイトをしようと考えたがやはり無理だった。

「こんなことで挫けてたまるか。次は何処に行こう？」

ポジティブな性格の八郎はあきらめなかった。その時、バイト募集の張り紙が目飛び込んで来た。八郎はそれを見るとすぐにそこに書いてある番号に電話した。

「はい。神林です」

子供の声だった。

「あ、間違いました。すいません！」

子供の声に反射的に電話を切ってしまった。（間違い？・・・いや、あつてるよなあ）リダイヤルで出てきた番号と張り紙の番号を見比べながら思った。そしてまた電話をかけた。

「はい神林です」

やはり子供の声だった。

「あの・・・バイト募集の張り紙を見たんですが・・・」

恐る恐る聞いてみた。

「バイト募集？何の事ですか？」

やはりこの張り紙の番号は間違っているのだろう。よく見ると下の方に去年の日付が書いてあった。何時まで経ってもバイトの電話が

こないで不思議に思わなかったのだろうか？そんな事を考えていた。  
「度々ご迷惑をおかけしました。すいませんでした」

そう言つて切ろうとした時電話の子供が叫んだ。

「待った！思い出した。それ、去年僕が張った張り紙です。全然電話こなくて忘れてました」

子供が張ったバイト募集の張り紙？冗談じゃない！ただの悪戯か！怒った八郎は電話を切ろうとした。

「貴方は採用です。今から言う所に来て下さい」  
子供が言った。

## 第一件・バイト探し（後書き）

初めて書いた作品です。出来は悪いですが一生懸命書きました。長い目で見守っていただければ幸いです。よければ評価の方もお願い致します

## 第二件・いらっしやい

八郎は無視して電話を切った。さっきのバイトの面接の事も有り怒りはピークに達していた。すると不意に電話が鳴った。

「もしもし！」

随分と乱暴なでかただった。

「いきなり切らないで下さい。まだ住所言つてませんよ」  
さっきのガキだ。

「うるせえ！何が採用です。だ！ふざけんな！」

大声で叫んだ。

「ふざけてんのはお前だ！」

いきなり後ろから怒鳴られた。

「採用されなかった腹癒せか！店の前でさわぎやつて！」

さっきの店の店長だ。ゴキ！！おもいつき殴られた。

「とつとと失せる！！！」

八郎は走って逃げた。

「何だ、僕の家場所解つてたんですね」

うずくまって肩で息をしていると電話から声がした。

「何？家？」

八郎が立ち上がると目の前に大きな家があった。

「早く入って来て下さい」

八郎は迷った。これ以上子供の悪戯に付き合いたくない。しかしこのまま立ち去ったら後悔する気がした。そして、もしかしたらいままでの生活から抜け出せるかもしれない。そう思った時には扉を開けていた。

そして、家の中に入って中を見回してみたが、家の中には生活用品が何もなかった。さらに、そこには誰も居なかった。

「階段を上がつて来て下さい」

二階から声がした。指示のままに階段を上がっていった。一段一段上るごとに階段がギシギシなった。全部で十三段あるうちの七段目を踏んだ瞬間突然床が抜けた。

「あゝあ。何をやっているんですか」

上から声がした。片足がはまったまま八郎は上を向いた。そこには誰も居なかった。

「早く来て下さい」

八郎ははまっている足を引き抜いてさらに上って行った。そして上りきったところには扉が一つあった。

### 第三件・採用

「どうぞ。開いてますから入って下さい」

八郎は一呼吸おいてから扉を開けた。そこは下の階と違い生活感があふれている部屋だった。しかし誰もいない。

「よくいらっしやいました」

扉側に背を向けている大きなソファァーから頭がでてきた。

「突っ立ってないでこっちに来て下さい」

ソファァーの正面に八郎は周った。そこに居たのは中学生ぐらいの子供だった。

「来るのが遅いですよ」「お前があんな悪戯をしたのか」

「悪戯なんてしてませんよ。本気ですよ」

「お前みたいなガキンちよがバイトの募集!？」

八郎はおもいきり笑ってやった。

「失礼な人ですね!それにお前でもガキンちよでもありません。僕は神林真昼です。呼び方は何でもいいですよ」

真昼は笑いながら言った。

「呼び方なんてどうでもいい。本気だと?何の仕事をするって言うんだよ」

「あれ?ちゃんと見なかったんですか?」

真昼が驚いた顔をしながら言った。「何を?」

「バイトの内容ですよ。ちゃんと家事の手伝いって書いてあったでしょ。別に店で働くわけじゃないですよ」

確かに書いてあったかもしれない。しかし、ろくに確認せずに電話したため、内容はよく見ていなかった。

「家事の手伝いって……お前の両親は?」

「親なんて別にいいでしょ。それよりも貴方の名前は?後!お前じやなくて、ま・ひ・るです」

最後だけわざとゆっくり言った。



「神崎八郎・・・」

「では、八郎さん採用です。明日から来て下さい」

「来て下さいって俺家事なんて何もできないよ」

「大丈夫です。詳しい事は明日話します。土曜日ですし朝から来て下さい。じゃあもう帰って下さい」

笑顔で追い返された。

#### 第四件・電話

家に帰った八郎はこの急な展開をいまいち理解出来ないでいた。その時携帯が鳴り始めた。

「もしもし」

「よう！ハチ！またバイト探ししてんの？」

友人の昭彦だ。

「いや、バイトは決まったんだけどさあ、なんか変な感じでさ」

「何？なんかやばい仕事なの？お母さんはお前さんの事が心配で心配で」

昭彦が茶化してきた。

「ふざけんなよ」

八郎が低い怒った声で言った。

「なんだよマジでやばい仕事なの？」

心配そうな声で昭彦が言った。

「いや、やばいんじゃないって変なの。雇主が中学生くらいの子供なんだよ。しかも仕事の内容が家事の手伝いだし」

「中学生の家事の手伝い？たしかにな。まあ、バイトが決まっただけいいじゃん。変な事言うからヤクザか何かの仕事かと思ったよ」

昭彦が笑いながら言った。

「そんなわけ無いだろう。そもそもお前がバイト紹介してくれないからこうなるんだ！」

「無茶苦茶言うなよ！まあ頑張れよ」

「ああじゃあな」電話を切って大きな溜め息をついた。

「はあー。やっぱりやめとけば良かった」

しかし、心の中では喜んでいて。バイトが決まったことと、何かが起こるのではないかという期待で。（そうだ・・・母さんに電話しておかないと）八郎は携帯を開いてダイヤルした。

「はい。神崎です。現在電話にでられません」

留守電だった。

「母さん。男の人と会ってる時にごめん。俺、明日からバイトいくから。まあ母さんには関係無いだろうけど……。じゃあ」

## 第五件・クビ？

翌日八郎は朝の九時から真昼の家を訪れた。

（なんだよ、朝から来いって言っただくせにまだ寝てんのか？）いくらチャイムを押しても誰も出てこなかった。（帰ろうかな）そう思った時電話が鳴った。

「そんなに何回もチャイム押さなくてもわかりますよ」  
真昼からだった。

「お前なー聞こえてるなら早く出て来いよ！」

「鍵、開いてますよ」

試しにドアノブを回してみた。開いた。

「早く来て下さい」

「鍵ぐらい閉めとけよ」

「別に僕の勝手でしょ」

「泥棒入ったらどうすんだ・・・」

また階段にはまった。

「八郎さんってバカ？」

電話からでなく上から声がした。パジャマ姿の真昼がいた。

「どうも・・・」

八郎がばつの悪そうな顔をして言った。

「人の家壊して遊ばないで下さい」

真昼が笑いながら言った。

「別に遊んでねえよ！」

足を抜きながら言った。それを見て真昼はあくびをしながら部屋に入って行った。その後について八郎も入って行った。

「来るの遅いですよ」

またソファーに隠れて見えなくなっていた。正面に周った。

「まだ九時だぞ」

「僕の朝は七時からです。二時間遅刻です」

真昼が真剣な顔で言った。

「そんな無茶苦茶な」

「雇主は僕ですよ？しっかり指示にはしたがって下さい。ま、それはいいとして仕事の内容を説明します」

仕事の内容は以下の通り

一・時間は七時から十時まで

二・基本的には留守番

三・指示には従うこと

以上・

「・・・留守番だけ？」

「はい。あ、でもたまに掃除とかしてもらいますよ。簡単でしょう？」

「いや簡単だけどさあ・・・それって家事手伝いっていつの？」

「さあ？でも仕事留守番じゃ誰も来ないと思って」

笑いながら言った。

「確かにね。でもさ七時から十時に留守番っておかしくない？」

人にはいろいろありますからね」

少し暗い声で言った。

「今まではどうしてたんだよ？」

まずいと思った八郎は話題を変えた。

「隣の家のおばさんに頼んでました。すごい文句言われてバイト募集したのに誰も来なくて。間違い電話やいたずら電話は増えましたけど・・・」

（多分俺と同じようなことだろうな）八郎が苦笑いをしながら思った。

「とりあえず今日は掃除やって下さい」

「えっ！？仕事は留守番だろ」

「さっき言ったでしょ。たまに他の事もやってもらって」確かにそう言っていた。

「じゃあ始めちゃって下さい」

八郎は渋々掃除を始めた。だがあまりやったことが無い八郎は余計に部屋を汚すことになった。

「ちよつと待った！何やってるんですか！？頼んだのは掃除ですよ！誰が汚せって言いましたか！」

真昼が本気で怒った。

「もういいです。八郎さんが壊した階段を直してきて下さい」  
トンカチと釘と板を渡された。

「わがまま言うなよ。だから家事はできないって言っただろ」

「予想外でした。ここまで使えないとは。クビにしますよ」

目が本気だった。その時丁度いいタイミングで電話がかかってきた。

「まったく。ちゃんと直して下さいよ」

（クビにならずに助かった）と思いながら部屋を出た。

## 第六件・初仕事

しばらくして階段を直していると真昼が部屋からでてきた。

「八郎さん。出かけてきますので留守番よろしくお願いします」  
大きな袋を抱えていた。

「それ終わったら休んでいて下さい」

真昼が階段を降りて行った。下から三段目の所で階段にはまった。

「ここもお願いします・・・」

顔が真っ赤になっていた。

「はいはい。何時頃帰って来るんだ？」

下に降りて行きながら聞いた。

「わかりません」

真昼は必死に足を抜こうとしていた。

「まったく。やっぱりガキンちゃだな」

足を抜いてあげた。

「・・・どうも」

顔がさらに赤くなった。

「車に気をつけろよ」

真昼が走って出て行った。

「仕事が増えた・・・」

仕事全て終わった頃には十二時を過ぎていた。時間がかかったが掃除もしておいた。今度は何とか出来た。（まだ帰って来ないのか）真昼が出て行ってから一時間以上経っていた。（あれ？メール来る）携帯が光っていた。真昼からだった。

（遅くなります。お昼は勝手に何か食べて下さい。冷蔵庫の中の物は使ってくださいですよ・真昼より）

（ん？何でアドレス教えてないのに・・・）不思議な事だ。しかし、

お腹が空いていたので余り考えなかった。冷蔵庫を開けてみたが中は空っぽだった。(えーと、どうしたら?) 出かけるわけにもいかず帰りを待つしかなかった。

「ただいま」三時を過ぎていた。

「八郎さんお疲れ様でした。あれ掃除もしたんですね」  
遊んできたのか服が汚れていた。

「お前、なんで俺のアドレス知ってんだよ。それに冷蔵庫の中何もなかったぞ」

「・・・」

真昼が何も答えなかった。少しふて腐れた顔をしていた。  
「何か言えよ」

「・・・お前じゃありません」

抱えていた袋を片付けながら言った。

「別にいいじゃん。そんなこと」

「よくありません! 名前は重要なんです!」  
本気で怒っていた。

「わかったから怒るなつて。じゃあ真昼。なんで俺のアドレス知ってんだ?」

「そんなの簡単ですよ。勝手に見たからです」  
笑顔で答えた。それを聞いた八郎は呆れてしまった。

「お前なんで勝手に見るんだよ!」

「真昼!」

「真昼なんで勝手に見るんだよ!」  
「だって知らないと不便でしょ?」

「〜」

呆れて何も言えなかった。

「あれ? 冷蔵庫の中何も無いじゃないですか。随分食べましたね」  
冷蔵庫の中を見て笑いながら言った。



「食ってねえよ・・・」

「え？」

「だから！何もなかったの！」

「ああそうでしたか。じゃあ買い物行きましょう」

そう言って真昼はさっさと出て行ってしまった。（マイペースだなあ）八郎も後を追って出て行った。

## 第七件・怪我

結局あの後も真昼に振り回された八郎は家に帰って今日一日を振り返って日記をつけていた。

今日は非常に疲れた。確かに普通の生活とは違うがなんだか望んでいたものとは違う。まあしばらくは頑張ってみよう

次の日八郎は学校にいた。

「ようハチ！」

後ろから声をかけられた。友達の昭彦だ。

「よう昭彦。朝っぱらから元気だな」

「なんだよ元気ねえな」

昭彦がつまらなそうな顔をして言った。

「別に。いつもだろ？」

めんどくさそうな顔をしながら言った。

「確かに。それよりバイトどうだったんだよ」

「それがさあ」

八郎は昨日の事を話した。

「へえ。何か面白そうなバイトだな」

「お前はやらないからそんなこと言えるんだよ。あいつの相手は疲れろぞ」

「今度会わせてくれよ」

「あいつがいつって言ったらな」

「よし。約束だぞ」

昭彦が走っていった。（ものずきな奴だ）

「おい。もう授業始まるぞ」

後ろから担任に言われた。教室に入って行った。

学校が終わった八郎は真昼の家に行った。

「あれ？まだ時間じゃないですよ」

商店街を歩いていたら真昼に会った。また、あの袋を抱えていた。  
「暇なんだよ」

真昼がジッと顔を見てきた。

「な、何だよ」

「どうせ補習さぼって逃げて来たんでしょ？」  
当たっていた。

「そ、そんなわけないだろう」  
動揺していた。

「まあいいですけどね。それより荷物、持ってください」  
買い物袋を持っていた。

「また買い物したのかよ」

「いいから持って下さい。気がつかない人はモテませんよ」  
痛いところをつかれた。

「うるせえ。ガキンちょに言われたくないね」

スネをおもいつき蹴られた。

「早く来て下さい」

うずくまっていると目の前に買い物袋を置いてさっさと行ってしまった。

ボーっと過ごしているといつの間にか七時になっていた。

「留守電頼みますよ」

大きな袋を抱えて出て行った。（あれ何だ？）すごく気になった。  
毎回出かける時に持っている。

よく考えると昨日の買い物の時も持っていた。  
ずっと考えているとふと写真が目に飛び込んで来た。（何だこれ！  
？）真昼の両親と思われる人の顔が破かれていた。（どういう事だ  
ろう？）考えているとしたから物音がした。（泥棒！？）近くに  
あった掃除機のホースを持ってゆっくり下に降りて行った。電気がつ

いておらず真っ暗だった。階段を降り終わった瞬間いきなり猫が飛びかかってきた。

「おわっ！！なんだよ猫かよ！びっくりしたなあー……」

電話が鳴った。着信アリのテーマソングだった。

「！！！」

声にならない悲鳴が出た。玄関の方からだった。（なんだよ。たかよー）少し膝が震えていた。玄関に行くと真昼の携帯が落ちていた。「も、もしもし……」

怖がりながらでた。

「どうかしたんですか？声が震えてますよ」

真昼だった。

「なんだ真昼かよー。なんだよ」

ホッとした。

「ちよつと怪我したんで迎えに来て下さい」

「はあっ！？怪我？大丈夫なのかよ！？」

恐怖が完全に吹っ飛んでしまった。

「それほどでもないんですが。とりあえず来て下さい」

遊びに誘うような軽さだった。場所を聞いた八郎は必死に走って行った。

## 第八件・本当

「ま・真昼。だ・大丈夫・夫・か？」

全力で走つて来たせいで息が上がっていた。

「そんなに急がなくても良かったですよ」

真昼が塀にもたれかかっていた。右腕から血が流れていた。下には血だまりがあった。

「馬鹿野郎！怪我したから迎えに来てって言われたら慌てるだろう！救急車呼ぶぞ！」

「そんなに大怪我でもないですから救急車はいいですよ」

「何がいいだ！このままじゃ死ぬぞ！」

八郎が本気で怒った。その時真昼の横に見た事の無い生き物が居た。

「真昼。この変な生き物何だ？これにやられたのか？」

真昼が驚いた顔をした。

「八郎さんこれ見えるんですか？」

「えっ？見えるけど？」

（変な事言ったか？）

「良かった。これでそれにトドメをさして下さい！」

真昼が真剣な顔をしてあの大きな袋を突き付けてきた。

「こ、殺す！？何で！」

いままでと違う雰囲気、真昼とその言葉に八郎は驚いた。

「そうしないといけないんです。早く！」

急かされて袋を開けると中には刀が入っていた。

「な！？刀！？」

「早く！逃げないうちに！」

八郎は刀を抜いた。ためらった。なぜこの生き物を殺すのかわからなかった。しかし、ためらっているうちに真昼が刀を奪った。そしてその生き物を勢いよく刺した。するとその生き物が光りになって消えた。

「うつ!!」

腕から血がでてきた。

「真昼!大丈夫か!?救急車呼ぶぞ」

「お願い・・・救急車は呼ばないで・・・」

それを最後に真昼は気を失った。

「うつ・・・八郎さん降ろして下さい」

真昼をおぶって八郎は全力で走っていた。

「真昼。気がついたか」

「ご迷惑をおかけしました。もう大丈夫です」

真昼を降ろした。

「さっきの何だったんだ?」

「それは・・・とりあえず家に帰ってから話しましょう」

真昼が笑った。

「・・・」

八郎が真剣な顔で真昼を見た。

「・・・ちゃんと話しますよ・・・」

笑うのをやめた。

「傷、大丈夫か?」

「もう平気です。少し痛むけど」

ははっと小さく笑った。それを見ると八郎は歩いて行った。後ろを  
ゆっくり真昼が付いて来た。

家に戻って来た真昼と八郎は黙ったまま座っていた。

「あの、とりあえず着替えたいんですけど・・・」

申し訳なさそうに言った。

「ん。早く着替えろよ」

「・・・出て下さいよ」

真昼が困ったような顔をした。

「なんで？」

八郎が不思議そうな顔で聞いた。

「なんでって・・・女の子の着替え見る気ですか？八郎さんのエッチ」

「・・・・・・・・」

八郎が考え込んだ。

「女・・・の子？って誰が？」

ゆっくりな口調だった。

「誰って。一人しか居ないじゃないですか！僕ですよ僕！」

八郎の思考がしばらく停止した。

「は！？冗談言ってるんだよ。早く話聞きたいんだから」

「冗談ってどういう意味ですか！とにかく早く出て下さい！」

追い出された。しばらく考えたがやはり納得いかなかった。（女の子？確かに女の子っぽい顔してとは思ってたけど・・・やっぱり冗談だよな）試しに中を覗いて見た。顔の中心に目覚時計が飛んで来た。

「！！！！」

真昼が怒って何か言っていたがわからなかった。（嘘だ。女の子があんな刀振り回したりしないだろう）また考え込んだ。鳴声が聞こえた。いつの間にか猫が足下に居た。

「まだいたのかお前。なあやっぱりあいつ男だよな」

猫に話しかけていると中から真昼がでてきた。男の子の様な格好をしていた。

「何やっているんですか？もういいですよ」

中に入って行った。

「さて何から話しますか？」

「お前は何者だ？」

「神林真昼」

「・・・何をやっているんだ？」

「化け物退治。退治屋です」

「退治屋？じゃああの变なのを殺したのも仕事なのか？」

「はい。でも殺すわけでは無く浄化するんです」

「浄化？」

「はい。あれは人の魂に何かの悪い影響があつてできた物なんです。だからあの刀でその悪い部分を浄化してあげるんです。まあ、信じてもらえるか分かりませんが」

真昼が少し笑った。

「確かに信じれないな」

「まあ、普通はそうでしょうね・・・」

真昼が少し悲しそう表情を見せた。

「信じられない。だからお前の仕事に今度から付いて行く。いいな」

「えっ！？」

真昼が驚いた顔をした。

「また怪我したから迎えに来てって言われても困るしな」

「だ、だめですよ！危ないですよ！」

真昼は必死に説得していた。

「女の子なんだろ？女の子にだけそんな危ない事させらんないっつうの」

八郎が笑った。そして不思議な事に気付いた。

「そつえば真昼傷は？」

気絶するほどの怪我だったのにもう痛い素振りを見せていなかった。

「昔からなんです。怪我してもすぐに治るんです」

「変わってるな」

「気味悪がらないんですか？」

真昼が驚いた。

「そんなこと言ってたらさっきの話だってそうだろ？まだ完全に信じたわけじゃないけど」



「まあ・・・でも本当に変わってますね八郎さんって」

八郎が笑った。

「ははっ。俺はこの生活から抜け出したいだけなんだよ。そのチャンスがやっとなたかもしれないんだ」

「やっぱり変わってる。でも本当に付いて来る気ですか？」

「ああ」

「死ぬかも知れませんよ」

「ああ」

「本当にいいんですね？」

「しつこい！」

「わかりました。明日から手伝ってもらいます。でもバイト代は増やしませんよ」

「わかってるよ」

「じゃあ今日はもう帰っていいですよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7118a/>

---

君のおかげ

2010年10月23日13時28分発行